

研究の概要

- 勤務校・職・氏名 (守谷市立御所ヶ丘中学校 教諭 鈴木 優子)
- 派遣先 (筑波大学 人間学群 教育学類/平成23年度前期)

1 研究テーマ

「内面」から「行為」へと拡げる道徳教育の可能性 —「主体的に社会に参画する力」を育む ESD の導入を通して—

2 主題設定の理由

(1) これまでの学校における道徳教育の傾向

- ① 「道徳的価値」(徳目)重視の道徳教育→道徳的な「自律性」を育てることが困難。
社会で是認されている一定の価値を受容し、社会規範やルールを遵守する個人を育成すること目的とされ、「受動的な形で価値観を習得させる」ことにウェイトがおかれた道徳教育が行われている。本来「道徳的価値」は、子どもの現実の生活や体験・人とのかかわりから主体的に学び、身に付けていくものではないかと考える。
- ② 「心理主義」偏重の道徳教育→道徳性が「矮小化」される。
「私」(内面)を強く意識することで、人や社会との「つながり」が断たれ、問題の本質、根源から目を逸らすことになる。社会の中の道徳的問題は、個々人のふるまいの問題へと矮小化され、その責任も個人化してしまう。「心の教育」において「道徳性」を捉える際、「内面」と「行為」のバランスを考慮すべきではないかと考える。

(2) 求められる道徳教育の意義と役割

学校における道徳教育の課題を改善し新たな道を拓いていくため、「つながり」をキーワードとした道徳教育を提案したい。

- ① 認識(道徳的実践力)と行為(道徳的実践)との「つながり」
「道徳的価値」を内面において認識するのみでなく行為へと拡げていく道徳教育を目指す。道徳の時間だけではなく、教育活動全体を見渡し、マクロの視点で学びをつなげていくことが必要である。(教科・領域、学校と地域・家庭、世界等。)
- ② 教育活動の「つながり」
道徳教育は教育活動の基盤である。そこで教科・領域をつなぐ「核」が必要となる。道徳的価値だけで連結するのではなく、現実の課題に直結するような新たな視点が求められる。教育活動全体を通じて「社会に主体的に参画する力」を育成することが重視されていくと考えられる。
これらのことから、ESD「持続発展教育」の視点を導入した道徳教育の実践が有効ではないかと考え、本主題を設定した。

3 研究内容及び方法

研究を進めるにあたり、以下の4つの視点及び方法から主題に迫っていくこととした。

- (1) 道徳性とはどのように捉えられているのか、これから求められる道徳性はどのようなものであるのか、文献研究を通して「道徳性」の定義を捉え直す。
- (2) ESD(持続発展教育)の特徴及び今日の教育的課題と ESD の関連性について、文献研究及び先行研究を通じて考える。
- (3) 道徳性の様相を「内面」から「行為」へと拡げる「ESD カリキュラム」を検討する。
 - ESD の視点を核に据えた道徳教育の再構築を、先行事例及び文献研究を通して検討する。
 - 過去の実践事例から、本校の道徳教育の課題を分析・検討する。
 - **中版「ESD カレンダー」の作成・提案。
- (4) ESD カリキュラムをもとに、授業実践を提案し、今後の道徳教育の可能性を示す。
 - 体験、体感、探求や実践を重視する「参加型アプローチ」を取り入れた授業を工夫する。
 - 学習効果を高める振り返り(リフレクション)の方法を検討する。

4 研究の成果 —研究を实践へとつなげていくために—

(1) 『道徳性』の定義について

『学習指導要領』では、学校の道徳教育における「道徳性」について、①「道徳的価値に基づいた道徳的行為の原動力」、「道徳的行為を可能にする人格的特性」②「内面的資質」=「道徳的実践力」(道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度)として示している。『解説』では、「内面的資質」=「道徳的実践力」を核として、道徳の諸様相を関連付けながら「道徳的行為」や「道徳的実践」まで拡げて指導することの必要性についても言及している。しかし、現実には「道徳的実践」との関連を意識せず、「道徳的実践力」を重視した道徳教育に留まっている傾向が見られる。その原因として、①「道徳の時間」の工夫・改善に力を注いでいるが、学校の教育活動全体で道徳教育に取り組むというマクロな視点が欠落していること。②内面的な「道徳的実践力」の育成に終始し、現実の社会や生活とつながる「道徳的実践」について明確に取り上げていないことが挙げられる。

そこで、これから求められる「道徳性」とは、「生きる力」の基盤として「道徳的実践」と「道徳的実践力」とを表裏一体化したものとして捉えていくべきではないかという結論に至った。

(2) ESD(持続発展教育)の特徴及び今日の教育的課題と ESD の関連性について

『学習指導要領』に新たに盛り込まれたのが、「持続可能」・「持続可能な発展」・「持続可能な社会の構築(形成)」という言葉である。現在、世界的な教育課題として「持続可能な社会」を築くための力の育成が叫ばれている。日本ユネスコによると「持続可能な社会」とは、人類が現在の生活レベルを維持しつつ、次世代も含む全ての人々により、質の高い生活をもたらすことができるような開発を目指していく社会だとされる。そのような社会を築いていこうとする人間を育む教育活動が ESD である。

ESD の基本的な考え方は、「持続可能な社会づくりのための担い手づくり」である。実施にあたっては、①人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと。②他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むことを重視していた。また、学び方においては①単に知識・技能の習得に留ま

らず、体験、体感、探求や実践を重視する『参加型アプローチ』を導入すること。②環境、経済、社会、文化の各側面から学際的かつ総合的に取り組むことが重要であることが示されていた。

そこで、人間性の基盤となる「道徳性」を育む道徳教育において、社会や人々とのつながり関係性を重視し社会へ参画する力を育むESDの視点を導入すれば、「道徳性」が内面から行為へと広げられるのではないかと考え、本校の道徳教育全般を再構築することとした。

(3) 道徳性の様相を「内面」から「行為」へと広げるための「ESDカリキュラム」の検討について

本校の道徳教育を再構築していくため、これまでの私の実践から課題を分析し、改善の手立てを考えた。課題は、①教科・領域間の「つながり」が意識化されていないこと。②道徳教育指導計画と学習活動の「つながり」が希薄であること。③内面（道徳的実践力）と行為（道徳的実践）の「つながり」が分断している。ことである。これらの課題から本校では、「見える」・「つながる」・「ふりかえる」をキーワードに道徳教育の改善を図ることとした。

○「見える」→「**中版 ESD カレンダー」を導入し、教科・領域を結びつけた学習活動を模索していく。「ESD カレンダー」が、教科・領域を越えた「生きる力」を育む「学びの道しるべ」となるよう、活用方法を検討していくこととした。

○「つながる」→「**中版 ESD カレンダー」を活用し教師間の共通理解を深めていく。学校が一丸となって道徳教育を進める。必要があれば家庭や地域とも積極的につながり学習を展開していくこととした。

○「ふりかえる」→「体験活動」後に、自分自身のもつ価値観の変容や自分の成長を振り返ることができる時間を充実させる。本研究では、道徳の時間を弾力的に充てることとした。

(4) ESD をもとにした授業実践の提案と検討について

提案した実践事例A・B共に、道徳の時間を「体験活動」の前後に設定した。道徳も体験も関連なく単独で実施したのでは、効果は期待できないであろう。日常生活の中の課題に気付いたり、道徳的な価値の内面化を図ったりした上で行う「体験」が生きてくるのではないかと考える。また、発見や感動が伴う豊かな「体験」ではなく、皮相的な「経験」として活動が終わらないよう、振り返り（リフレクション）活動を道徳の時間に意図的に設定することとした。

* * *

研究を通じて、ESDは持続可能な開発の知識やその解決に向けた具体策などを受動的に学ぶものではなく、持続可能な社会の実現という観点から課題を認識し、課題解決に向けて行動することができる力を身に付ける「能動的な学び」であるということが分かった。

文部科学省は、「持続可能な社会づくりのための担い手づくり」であると捉え、「環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすこと」を目標にしていることから、ESDは今後も重要視されていくことが考えられる。また、ESDが道徳教育とも密接に関連していることについても明確になった。ESDは、責任感や他人との関係性の認識といった道徳的心情や態度（内面）と体系的な思考力や情報収集・分析力、コミュニケーション能力とを結びつけ、社会問題を解決する具体的な行動（行為）へと広げることを目指している。実践事例の提案においては、この目標を具現化できるよう、道徳教育を核として教科・領域をつないだ単元構成の工夫や認識を行為へ広げる発展性のある体験活動の導入を試みた。これらのことから、ESDの視点を取り入れた道徳教育によって「主体的に社会に参画する力」が生まれ、「道徳性」が「内面」から「行為」へと広げられていく可能性を見出すことができた。

5 研究の課題

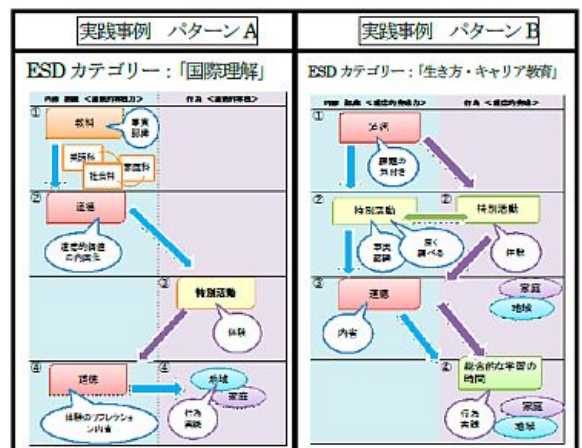
(1) ESDの視点を取り入れた道徳教育の推進と充実

まず、本研究で提案したESDの視点を取り入れた道徳教育についての共通理解を図り、推進体制を構築したい。その後、提案した事例を実態に応じて実践していく。さらに、実践までの過程及び結果を分析することで新たな課題を見出ししていく。

(2) 「道徳性」をさらに向上させるために

地域との「つながり」を「コーディネート」していく方法を検討したい。ESDの視点をもとに「道徳性」を「行為」へと広げていく鍵は、人と人との関係性・現実性・身体性である。その際必要となるのは、学校と地域を「コーディネート」していく人材・場所・時間ではなかろうか。学校から地域に人材や体験の場を求めただけではなく、地域からも学校へそれらを提供していく提案することができる、インタラクティブな関係の構築が求められる。まずは、学校行事や学校公開日などを通してESDという観点をもとに道徳教育を行っていることへの周知、理解を広げていきたいと考える。さらに、教育委員会や守谷市との連携を図り、学校での学びと地域での体験を結ぶコーディネート機関（例えば、東京都多摩市のNPOセンターや学校コーディネーター、神奈川県都筑区の「学校支援地域本部」など）の必要性についても共に考えていきたい。

【図1：「平成24年度 **中学校版 ESD カレンダー」(試作)】



【図2：「つながる」、「ふりかえる」を重視した道徳教育の実践事例】